

# 分科会総括研究報告

東北大学医学部産科婦人科学教室

鈴木雅洲

## ○ 研究目的および方法

この研究の目的は、胎児障害すなわち胎児死亡・胎児先天異常・胎児疾患・子宮内胎児発育遅延・流早産・などが、社会の変化に伴った生活環境・社会構造・医療によって如何なる影響をうけるかを調査する目的で行なわれた。この成果は、将来の母子衛生行政に重大な示唆を与えるものと思われる。この研究の方法は、疫学調査に重点をおき、また必要な臨床検査を行ない、データは統計学的処理を行なった。

## ○ 研究成績の要約

### 1. 10代婦人の妊娠に関する研究

#### A 疫学調査

- a 人工妊娠中絶が多い：857例中595例と69.4%を占めていた。この人工妊娠中絶は将来の母性衛生に対して肉体的・精神的に悪影響があると思われる。
- b 避妊の経験：全体として46.4%であり、15才以下が30%、16～17才が50%、18～19才が60%であった。
- c 受胎調節の方法：コンドーム使用が86.5%を占めたが、避妊をしながら妊娠している率が高かった。
- d 性教育を受けた経験のある者は54.9%であるが、とりわけ16才以下では3人に1人しか受けていなかった。人工妊娠中絶となる例が多いので、性教育の普及を急ぐべきである。

#### B 分娩異常

- a 10才代の低体重児出生率は14.3%であり、対照群は3%であった。
- b 妊娠中毒症罹患率は8.3%であるのに比べ、対照群は4%であった。また10才代の妊娠中毒症には重症例が多く、子癇も2例あった。妊娠管理がうまく行なわれていないためと思われる。

#### C 戸籍上の問題

同じ10代妊娠でも、低体重出生は、結婚してから妊娠出生したものは、19例中0例であった。これに対し、最後まで結婚しないものでは、12人中5人（41.7%）の低体重児出産があった。また、結婚してから妊娠して、中毒症になったものは19人中2人（10.5%）であるのに比べ、未婚のまま妊娠し、中毒症になったものは12人中2人（16.7%）であった。

### 2. 婦人と嗜好品（カフェイン）

4,550例中のコーヒー飲用者で検討した結果、1日5杯以上の飲用群60例中においてSGAの有意の増加をみた。その他の嗜好品については検討中であり、抹茶の症例群は少いため、今回は結論をさけた。尚、コントロール例は1,242である。

### 3. 現代生活（冷房・ビル居住・勤労婦人・交通機関利用・旅行・核家族）

- A 肥満度：1,115例の妊産婦で検討した結果、まず肥満度の上昇に伴って妊娠中毒症及び糖尿病の発生頻度が増加傾向をみたこと、また帝王切開の増加、LGAの出生頻度の増加を認めた。なお、肥満者のみならず、るいそう者においても分娩時出血量の増加傾向がうかがわれる。

- B 核家族：1,254例での検討では、夫との同居が98%、子供との同居が51%で、子供の数が増えるにしたがい切迫早産の頻度の増加を認めた。

- C 勤労婦人：1,255例中、勤労婦人は368例であった。勤労婦人において月経不順、骨盤位分娩、前早期破水がやや多い傾向を認めた。

- D 旅行：1,255例中、妊娠中旅行した婦人は735例で、回数では1回が63%と最も多く、利用機関は自動車(75%)、列車(40%)、航空機、船の順であった。切迫流早産については、対照群の7.3%に対し、むしろ旅行群では3.3%と減少傾向を認めたが、船を利用した場合の切迫流早産は13.6%と利用した乗物別のうち最も多かった。
- E 冷房：1,255例中、冷房使用は398例で使用頻度は33%で、平均冷房時間は1日、3～4時間が最も多かった。
- 一般に産科異常は、冷房時間、冷房期間が長い程非冷房群に比して減少している傾向を認めた。
- F 交通機関：1,184例中交通機関を利用したのが36%で、自家用車、バス、自転車の順に多かった。
- 今のところ産科的異常については、利用群、非利用群との間で差がみられていない。
- G ビル居住：一戸建て住いの婦人が62%、ビル居住が33%であり、まず、切迫流早産の頻度は1・2階に比べ、3・4階以上に居住し、しかもエレベーターの非利用者に多かった。また糖尿病、喘息の発生頻度は4階以上居住者に多かった。人工流産は1・2階居住者に多かったが、なお今後、多数例での検討を要すると思われる。

#### 4. 輸血の影響

妊娠において、母児間血液型不適合により胎児赤芽球症(または胎児溶血性疾患)が発現し、新生児死亡・児の中樞神経後遺症の原因となることは衆知であり、このためRh血液型の検査が行なわれてきた。しかし、妊婦の血型で検査されているものはRh-Dだけに限られているため、最近の新生児重症黄疸はE型の母児間不適合の場合に多い。今後は、すべての母体につきE型の検査をする必要があると思われる。母体のRh血液型が、e型である場合には抗体の有無の検査を必要とする。

#### 5. 妊娠期の栄養の実態と保健指導

栄養摂取の実態調査をコンピューターを使用して検討し、妊娠期の栄養に対する今後の方針を決めたい。このたび、調査用紙・調査機構・調査方法を確立した。

#### 6. 乳児に見られるビタミンK欠乏性出血素因に関する研究

最近母乳栄養の普及により新生児期をすぎた乳児期に原因不明な頭蓋内出血を主とする重篤な出血性疾患が増加している。死亡率が高く生存例でも後遺症を残す場合も少なくない。頻度は長野県1:2,700、静岡県1:3,700であり、ビタミンK欠乏が100%認められる。現在全国調査を開始しているが過去3年間の発生は437例である。全国で換算すると1年間に500例発生していることになる。この頻度は全国の全乳児をスクリーニングするに値する頻度である。これは先天代謝異常の頻度よりも高く、かつ結果は重篤である。

発生年齢は生後3週から8週までで男子に多く、また夏に多い。原因は多岐にわたるが、母乳によるものが最も多く2/3を占める。

出血部位はクモ膜下と硬膜下が半々である。予後は死亡が15.9%、後遺症を認めたもの37.0%、全治癒は、47.1%である。乳児の約10%がビタミンK欠乏症になるが原因は不明である。現在のところ原因を研究中である。

#### 7. 在胎週数ならびに出生体重からみた早期新生児死亡率ならびにその対策に関する研究

胎児発育曲線は従来ルブチエンコヤ船川の曲線が用いられていたが、10数年以前のものであり、今回、最新の18,000例の多数例について胎児発育曲線を作成した。

早期新生児死亡率は0.26%であった。この曲線の作成は我国の母子衛生における重要な基礎的資料となるであろう。

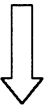
#### 8. 胎児の性差とホルモン値

現在、胎児の性別は羊水穿刺による染色体分析で判別することが可能である。本研究は羊水穿刺の如き危険を伴う操作を行わないで、内分泌学的検査によって胎児の性別を判別できるか否かを検討することを目的としている。在胎18週以降の臍帯血143例について検討した。血中テストステロン値は、女兒は全妊娠期間で大きな変動は示さなかった。男児では女兒より高値を示し18～27週でピークとなり以後妊娠週数がすすむにつれて低下した。胎児血中FSH値は女兒では20～25週、男児では25～30週をピークとする増加を示し、30週までは女兒が有意に

高値を示した。32週以降は男・女とも低値を示し、性差は認められなかった。胎児LH レベルについてはhcg との交叉反応の問題があり、特異的な結論は出せないが、LH レベルには性差は認められなかった。



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



#### 研究目的および方法

この研究の目的は、胎児障害すなわち胎児死亡・胎児先天異常・胎児疾患・子宮内胎児発育遅延・流産・などが、社会の変化に伴った生活環境・社会構造・医療によって如何なる影響を受けるかを調査する目的で行なわれた。この成果は、将来の母子衛生行政に重大な示唆を与えるものと思われる。この研究の方法は、疫学調査に重点をおき、また必要な臨床検査を行ない、データは統計学的処理を行なった。